

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	西亀有三丁目保育園
施設所在地	東京都葛飾区西亀有3-31-9
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

触れて試して楽しんで①

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

開園してから三年目。昨年度までは数えるくらいしか水遊びが出来なかった。子どもたちが水で遊ぶ楽しさを経験していない。子年度は安全目に配慮しながら、園内の屋根のあるところを2か所を使用し、存分に水で遊び、水で遊ぶ楽しさ、気持ちよさ、水の動き、流れの楽しさを友だちと共有していく。

2. 活動スケジュール

【子どもの観察とスタッフの意識統一】 7月

・活動の方針についてスタッフで子どもたちの様子を見て話し合いを行う

【水に慣れる】

・7月から熱中症アラートを確認の上、可能な日は毎日のように水遊びを行う。

最初は水の苦手な子どももいるため、少人数ずつ行う。水の量も少なめにしてみず触れることから楽しむ。

【遊びを広げる】

・慣れてきたら水の量や玩具を増やし、様々な遊びを楽しめるようにする。

・大人が遊んでみせ、無理のないよう子どもに合った触れ方、水のかけ方を考慮していく。

【集団で水遊びを楽しむ】

・8月 慣れてきた子どもが増えたところで全員で水遊びを楽しむ

・体にかかったり、多少掛け合う事も見守り、全身で感触を楽しむ。

・玩具を使用し、自分で流したり、流れる水を観察したりする。

【活動を振り返る】

9月 活動のまとめ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・室内からすぐに移動できる日陰で活動が出来るようにする。
- ・水で足元が滑らないよう、全面に滑り止めのシートを敷き詰める。
- ・タライを小。中の大きさを複数用意し、場合によっては一人遊びも楽しめるようにする。
- ・タライを通して向き合って遊ぶことでお互いの様子を気づく、一緒に楽しさを共有できるようにする。
- ・バケツ、ひしゃく、水車、水が吹き出す玩具、水から拾い上げるものなどを用意し、水遊びを多彩に楽しめるようにする。

- ・滑り止めシート 水による転倒防止のため広範囲に敷いた。
- ・ミニプール、各種タライ 子どもが小グループで遊ぶために使用
- ・噴水プール 水浴び、複数人数での水の共有
- ・各種玩具：おもちゃバケツ、すくい網、水車、つなげてバケツ、おもちゃスポイト、たこたこパニック、レインボーかんらんしゃ、水ひしゃく、スプラッシュボール、水風船ヨーヨー、なかよしバケツ、ゴム製ボール
- ・デッキブラシ、ドライワイパー 水遊び後の清掃に使用

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【子どもの観察とスタッフの意識統一】

スタッフが子どもたちの様子を観察し、どんな活動を行うか意見を出す。一定時間遊ぶ環境をつくる、玩具の数や種類を増やし遊びの幅を広げていく方針を皆で確認した

【水に慣れる】

受け入れ後ひと遊びし、水分補給も行い、心身ともにしっかり目覚め、安定した状態で水遊びを始める。最初は触れることを楽しむ。それぞれの遊び方や慣れ具合によってタライの使用の仕方を変える。一人遊びからはじめ、子どもが水遊びになれるところから始めた

【遊びを広げる】

自主的な遊び、保育士が関る姿を見て真似る、友だちと楽しむ。

水の感触そのものを楽しみ、水面を叩いたりする。すくうものがあるとひたすらすくっては流す。バケツにためた水をこぼす、水が流れる玩具を使用すると、その流れの様子をじっと見ていた。個々のペースで水との関りを広げていった

【集団で水遊びを楽しむ】

水遊びが楽しくなり、グループ的な遊びを行うようになる。見ていることから自分でもやってみようとする姿が見られるようになる。試すことを楽しむようになる。友だちのあそんでいる姿から波及して同じことをしようとする。

【活動を振り返る】

水遊びについて振り返り、保護者に子どもたちの変化や様子をドキュメンテーション等を通じて発信する。保護者にも活動の意図を理解していただき、対話が活発になる

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

新しい環境設定であること、水遊びの経験がないことで、最初は泣いたり、遊びに加わらない子もいた。保育者が楽しそうに遊ぶ、他の子との関りを見せることで、徐々に楽しさが伝わり、自分から水に手をのびしたりさわってみたり、水の中に手を入れてみるのが広がる。

水面をたたくと水がはね、驚いて泣く子もいた。保育者が抱き取り「大丈夫だよ」と声をかけ、保育者が手にすくった水をさわることによって「もっと」と楽しくなる。

少しずつ安心して遊ぶ子がふえてくると、タライのまわりに集まり、友達の遊びをまねをして「一緒だね」と笑い合う姿が広がる。保育士が水の様子をオノマトペで言葉にして伝えると「バシャ」「ピチャ」等子どもも真似することでさらに遊びが楽しくなっていった。

水車に水を落としまわるのを見せるとじっと見つめ、「回っているね。クルクル」と声をかけると保育者の顔を見る。自分で水をかけ回ると確認するように保育者の顔を見て「クルクル」と言いながら自分でも水をかけ水車をまわす遊びが広がっていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

普段から毎日のお風呂に入っているにもかかわらず、水遊びとなるとまだ未経験のためか、嫌がる子どももいた。水遊びの感触を概ねの子どもが喜ぶと予測していたが、0歳児だけとは限らず身構える、嫌がるというスタートだった。

未経験のこわさを乗り越えるためには、やはり保育者の関りは大きく、安心できる保育者からの誘いで子どもは手を出し新しい体験にチャレンジする事を再認識した。

水は形をたやすく変えるため、水面を叩いて飛び散る水の動きに驚く。ちょっとくらいと思いがちであるが、予想をしていない水の動きに小さい子はとても驚き、それを楽しめる子とを怖いと感じる子どもがいた。タライの周りで遊ぶことは、向き合って遊ぶことに自然になるため、その後は友達同士の学びあいが大きかった。おのずと丸くなる環境設定は子どもの協同性に効果があることに気づき、普段の遊びの環境設定にも取り入れていきたい。

今回は、一定時間水遊びを継続的に実施する活動計画を立てた。従来の遊び時間5分では気づけなかったものが、遊びを継続する中で子どもの変化が生まれた。時間を継続する設定は子どもの活動の深まりに大きな影響があることに改めて気づいた。

水遊びはどの子どもも好きという先入観があったが、どんな活動も安心できる大人の関りで深まり、友達の力、環境設定、時間設定が、子どもの活動を広げることに気づいた。今年入り口に立った水遊び、今年を基盤に来年度はより水と仲良くなる環境づくりにトライし、活動の深まりを追求したいと考えている。